
夕日の向こう側

空丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日の向こう側

【Nコード】

N2472T

【作者名】

空丸

【あらすじ】

生きること嫌気がさしていた圭太は、道端で出会った少年ユーマに突然『死』を告げられる。死神と名乗るユーマに連れられ、自分が死んだあとの家族や友人達を見に行った。生きていることの幸せってなんだろう。

出会い（前書き）

初めての投稿なので、至らない点が多々あると思いますが
よろしく願いします。

出会い

僕は人生に飽き飽きしていた。

別に生きていることに興味なんてなかったし
いつ死んだっていいって思ってた。

だからって、何か悩みを抱えているわけでもなく
普段通りの生活を送っていた。

ただ飽きただけだった。

気付くと家から少し離れた場所を歩いていた。

ここは——全寮制の高校へ進んだ弟の寮のそばだ。

「会いにきたつもりはないんだけどな。」

言い訳をするように独り言をつぶやいた自分に笑えた。

『あれ、オレが会いにきたってよく分かったね、
じゃあ、一ついいことを教えてあげるよ。
あんた、もうすぐ死ぬよ』

僕の眩きに返事が返ってきたことに驚いて
後ろを振り向くと、全身黒づくめの少年がいた。

この暑い日に全身黒の服なんてどういっつもりなんだろう
そんなことを考えながら、ぼんやりと少年を見ていると。

『オレのこと、見えるんだね。

まあ、いいや。

それより、あんたもうすぐ死ぬよって言ったの聞こえた？
あ、このトラッ——』

キキィィ——ドンッッッ

耳元ではじけるような音と共に
体が浮いた気がした。

離れる

「浮いてる気がするっていうか、浮いてるんだけど。」

「え。」

ドンと、衝撃を感じたと思った瞬間。

さっきの少年に突っ込まれていた。

「今、僕なにか言っていた？」

というか・・・状況が掴めないんだけど。」

とりあえず、周囲を見渡してみる。

状況を知るには視覚から得るものが一番だからね。

今いる場所は

さっきまでいた道路だ。

ただ、高度が少し高いみたい。

下を見下ろすと、事故現場という感じの雰囲気広がっていた。

道路からはみ出たトラックと

そこから15mほど離れたところにある、赤い水たまり。

おそらく・・・

僕のもの。

そして、その2つをを少し離れたところから見ている人たち。

「僕は、死んだんだね。」

視覚から得た情報を簡単にまとめて出た答え。

「さつきから、そう言ってるでしょ。

でも、案外冷静だよ、あんた。」

「あんたじゃなくて、圭太って名前だあるんだよね。」

さつきから、あんた、あんたって言われてなんとなくイラッとしたから

名乗ってみた。

「知ってる。にのみやけいた二宮圭太17才。2月9日生まれのA型。デシヨ?」

どこから出したのか、何か書類のようなものを見ながら僕の個人情報

報をべらべらの話し出した。

「君は一体何者？」

「「死神」？」

聞いといて、悪いけど。

なんとなく、そう思ったから言ってみたら。
少年と声が被った。

「わかってんじゃん。」

フツと口だけで少年は笑った。

「本当に？」

言いながらも、僕は少年が死神だという気がしていた。

Tシャツに半そでのシャツを羽織って
ハーフパンツにスニーカー

これだけだと、普通の夏の日の格好に思えるかもしれないけれど、

全身黒づくめなんだ。

スニーカーのヒモまで。

この暑い日にしては少し異様な格好。

そして、僕の死の宣告。

極めつけは、僕同様に宙に浮かんでいること。

最初は一緒にトラックに轢かれたのかとも思ったけれど、よく考えると、あったその時から少年は地に足がついていなかったと思う。

「そう。オレはユーマ。死神だよ。
あんたの案内係。」

「あ、じゃなくて圭太の！！案内係。」

『あんた』って言った瞬間、僕が目を細めたことに気付いたみたい。慌てて少年——ユーマは僕のことを名前で呼びなした。

「ってユーカ、今そんな話してる場合じゃないんだよね。
早く、あんたっじゃなくて圭太の乗った救急車。追いかけないと。」

「は？」
聞き返す暇もなく手を引っ張られた。

離れる（後書き）

とりあえず、1話では、全く意味が分からないと思うので
続きを書いてみました。

が、まだまだ分かりにくいですよね；

今日はもう眠いので、これで寝ます。

序々に説明を加えていくつもりです。

認識する

ユーマに引つ張られてたどり着いた大きな病院。

以前、弟の太一が怪我をしたときに来た病院だった。

「たぶん、この病院だと思っただけど・・・

救急車間に合わなかったし。圭太の体がどこにあるかわかんないし。」

「そうなの？死神にもわからないことなんてあるんだね。」

「当たり前じゃん。ゲストの死ぬ時間と原因。あとは

身辺情報みたいなもともと与えられたカルテに載ってること以外俺にはわからないよ。」

そう言つて彼は、さつきと同じようにどこからか書類のようなものを出した。

「そーなんだ。プライバシーとか関係ないんだね。

僕にもそれ見せてよ?」

さつき会ったときにユーマが見てたものだと思うけど
どんなことが書いてあるのか気になった僕は手を出して
それを要求した。

「やだ。

プライバシーなんて下界のルールだからね。

天国では通用しないわけ。」

ユーマは断ると、カルテをポケットにしまった。
A4サイズのファイルをズボンのポケットにさも当然のようにしま
う。

ドラ○もののポケットみたいだと思った。

たぶん出すときも普通にポケットから出したんだろうね。

「まあいいや。

とりあえず、屋上で待とうか?」

そう言うと、ユーマはふわふわと病院の屋上の方へと向かった。
僕もそれに続きながら、聞いてみた。

「何を待つ?」

「圭太の保護者だよ。

警察から連絡を受けてそのうち病院に来るだろうからね。
来たらそれを追っかける。」

チク

言われて、

僕が死んだことを認識した。

さっきまで死んだってことがウソ。というか
夢みたいな。

どこか信じきれない軽い気持ちでいたのに

「保護者」と聞いて母さんや姉さん、弟を思い浮かべてしまった。

「圭太？」

黙ってしまった僕に怪訝そうな顔でユーマが覗き込んできた。

「ああ、ごめん。」

考え事してた。なんだっけ？」

今の顔を見られたくなくて、すぐに笑顔を取り繕った。
作り笑いは得意なんだ。

「屋上行くよ。」

たどり着いた屋上。

この病院は7階建てなので8階が屋上になっている。

僕達はフェンスにもたれかかると

外を眺めた。

空は青い。

久しぶりにゆっくりと青い空を見た気がする。

いつも見ているはずなのに・・・。

違和感を感じる。

ただの写真を見ているような、どこか遠く別の場所から
この景色を見ているような。

後ろを振り返って屋上の方を見てみた。

ひまわりの蕾がついた植木鉢がおいてあった。
長く伸びた茎が風に揺れている。

「風……。」

そう、今日は珍しく風のある日で
気温は高いけれど日陰にいると涼しい。というそんな日だったこと
を思い出した。

「ああ、俺達に風は感じられないよ。」

僕の言いたいことに気付いたユーマが言った。

「身体はないからね。生きていたときのように
風を感じること、太陽の暖かさを感じること
水の冷たさ。そういったことは分らないんだよね。」

目を瞑って、手を広げて、深呼吸する。

精一杯、太陽や風を感じようとしながら
ユーマが言った。

空を見上げたその顔は、どこか寂しそうだった。

僕も手を広げて、太陽を見た。

眩しくない、暑くない。
風も・・・。

生きているってそういうことだったんだ。

急に恋しくなった。

前まで鬱陶しく感じていた
太陽の照りつけるような暑さや
髪ぐしゃぐしゃにしていく風。

すべてを濡らす雨。

もう、僕にはわからない。

そう、認識した。

おとうと

「あれって、あんたっじゃなくて
圭太の家族だよね？」

相変わらず、僕の名前を呼びなれないことに
僕自身が慣れるしかないのかと、突っ込むのをやめて
ユーマの見ている方を覗いてみた。

そこには病院の正面玄関に横付けしたタクシーから出てくる
女性・・・と青年。

「母さん。太一・・・。」
声が漏れていた。

久しぶりに見た弟は、前見たときより
背が伸びていることに気付いて少しの嬉しさを覚える。

「何やってんの？
早くあの２人についてくよ。」

「ごめんごめん。」

ユーマについて屋上から飛び降りるように
下に向かった。

病院の自動ドアを抜けた、2人は小走りで
受付へと向かう。

「すみません。先ほど救急車で運ばれてきた小川圭太の母親ですが、
息子の病室はどこでしょうか？まだ手術中ですか。」

「小川圭太さんですね。お調べしますので少々お待ちください。」

受付の女性は奥のほうへ入っていくと
デスクに座っていた人と二言三言話すとまた
カウンターへと戻ってくる。

「霊安室は地下にございます。案内の者が来ますので少々お待ちく
ださい。」

そう、2人に告げた。

「……え……。」「

今聞いたことが信じられないと言った顔で、受付の女性を見る太一の横で

母さんが

崩れるように

倒れた

「え！？お袋！？！？

お袋！！！！

ちよ、誰か！！！！」

母さんを慌てて抱き上げて、助けを求めながら周りを見回す太一に何人かの病院スタッフを思われる人達が寄って行った。

少しして病人を乗せる台車が運ばれてきて

そこに母さんは乗せられた。

「お袋！！！！」

太一の呼びかけに、母さんはうつすらと目を開けた。

「ごめんね、太一。私はいいから。

圭太のそばに。いてあげて。」

そのまま、母さんは運ばれていった。

取り残された太一に、2人の男が近づいていった。

「君は、小川君のご家族の方かな？」

「は．．い。」

あ、弟です。兄貴の．．??」

「ああ、ごめんね。突然びっくりするね。

僕は弁護士なんだ。君のお兄さんのところまで案内するよ。」

「はい。」

僕達は太一達の後を付いていった。

ただ、何も考えず、付いていった。

「圭太．．．。」

「こちらです。」

男が扉を開けて太一が入れるように促した。

太一は黙って、部屋の中へと進む。

僕がいた。

顔は布で覆われていて見えないけれど
自分だからこそ、よくわかる。

もう一人の男性が僕の顔の上にあった布をゆっくりとはずした。

「・・・。」

静かな部屋の中に太一の息を飲む声が聞こえた。

眉間にしわが寄っていき
唇をかみ締める。

しばらく、何かに耐えるように
顔をしかめていた。

「あの、一人にしてもらえますか？」

部屋に響く太一の声。

「わかりました。」

男達は部屋を静かに出て行った。

残ったのは、僕とユーマと太一。そして僕の遺体。

太一はゆっくりと僕に近づいていく。

「あに・・・き？」

「本当は生きてるんだろ。
何ねたフリしてんだよ。」

今更俺が兄貴の冗談に、騙される・・・ワケ・・・。」

そのまま僕の体の横に突っ伏した。

時折聞こえる嗚咽は

太一が泣いていることを僕に教えてくれた。

泣き声を押し殺すように泣く太一の姿が痛ましくて
見ていられなかった。

「ユーマ。」

屋上、行こうか？」

こくりと頷いたユーマを見て、僕達は屋上へと向かった。

「太一が泣くのを久しぶりに見たよ。」

昔は泣き虫だったんだけどね。」

上を見上げると、空は少しオレンジがかってきているようだった。

昔話をしたくなった。

ユーマの方を見ると、僕と同じように空を見上げていた。
話を聞いてくれる気がして、僕は話始めた。

「僕達がすごく小さい頃。

僕も太一もテニスのスクールに通っていてね。
よく2人で遊んでたんだ。

試合するたびに負けていた太一。

今のは練習だー

って言ってよく泣いていたな。

中学に上がる頃には完璧にライバル扱いされて
泣き顔どころか、笑顔さえ見せてくれなくなったよ。

反抗期だったんだろうね。少し寂しかったなー。

高校はテニスの腕を見込まれて特待生になったよ。
残念なことに僕とは違う学校で、しかも寮生活。

部活の休みのときに家に帰ってきて
『試合しろ』って言うから試合して、
僕が勝って。拗ねて、夕飯中一言もしゃべってくれなかったり。

嫌われてるって思ってた。」

「ふ・・・どこが。」

苦笑しながら言う僕に、ユーマは鼻で笑った。
何言ってるの？ そう言いたいんだと思う。

「うん。もう分かってるよ。」

あんなに泣かれるとは思ってなかったってことだよ。」

「てゆーか、泣く以前に
めちゃくちゃブラコンじゃん。あんたのオトウト。
俺とおんなじだ。」

「え？」

最後の一言は聞こえなかったけれど、ユーマに笑ってごまかされた。

まあ、僕は忘れないよ。

今は忘れたフリをしてあげるけど。

死神の仕事

「今更だけど、死神ってなんのためにいるの？
僕を天国まで案内してくれるってことかな？」

「ああ、忘れてた。
今から説明するよ。」

ユーマは手すりに手をかけると「ん」と言っ
てジャンプして体を持ち上げ
そのまま手すりに腰掛けた。

長い話になるのかなと思って、僕も同じように手すりに腰掛ける。
もしこれが、僕達が生きていて、下の人たちに姿が見えたのなら
自殺志願者として通報されたりして騒ぎになるんだろうと少し思っ
た。

「まあ、さっき圭太が言った通り。死んだ魂を天国に連れて行く。
それが俺たち死神の仕事だよ。
俺たちが仕事をしないと魂がこの世界に彷徨って
その内に消えちゃうからね。」

「幽霊になっちゃってこと？」

「うーん。基本的に幽霊っていないんだよね。
言っとすれば今の圭太が幽霊ってことになるかな。」

でも魂は、本来肉体の中に入っているものだからしばらくこの世界に

魂のままでいると消えちゃうんだ。」

「ふーん・・・。

魂って消えたらまずいの？

死神って仕事がそんなに必要にも思えないけど。」

「当たり前じゃん。

人がこつちの世界で死ぬってコトは、あつちの世界で生まれるってコトになるんだから。

魂の数は一定なんだよ。」

「あつちの世界？」

「あつちの世界ってのは・・・天国のことだと思ってくれればいいよ。」

「ふーん。

死んだら生まれ変わるっていうことかな？

あつちの世界ってのが良く分らないけど。」

「まあ、俺も良くわかんないんだけどね。

天国には行ったことないから。

ただ、ジュン——って俺の先パイなんだけど、ジュンが言うにはこつちの世界で悪いことをした人は天国で苦労するし、

いい行いをした人は幸せに暮らせる。って行ってたけどね。」

「へえ、仏教とか宗教ってあながち間違いでもないんだね。」

天国とか地獄ってのは生きているうちにも聞いていた言葉だし。

「どうかな。」

簡単に言っと。あつちで生きているかこっちで生きているかのどっちかなんだよね。

あつちもこっちも生活はあまり変わらないし

こっちの世界に比べて確実に平和って言ってたけれど、

向こうでも死ぬんだよ。で、こっちに生まれる。の繰り返し。

さっきも言っただけど、俺、あつちの世界には行ったことないからジユンの受売りだけだ。」

なんとなく分かった気がする。

でも、百聞は一見にしかずって言うし、結局僕はユーマの案内で向こうの世界に行くわけだから、その時に分かればいいかなって感じ。

「だったら、僕はこれからどうすればいいのかな？」

とりあえず、これからのことを聞こうと思った。

「今日予定通り死んだから。」

明日お通夜をやって、順調に行けば明後日お葬式だと思うんだけど。

それは圭太んちで確認してみないとわかんないから後で行くとして・・・。

どうする？お葬式。出席する？」

「する？ってことは欠席っていう選択肢もあるの？」

「悲しすぎて見ていられない、とか。死んだことを実感したくないって理由で欠席する人もいるよ。」

「へえー。僕は参加しようかな。」

クラスメイト達が僕を想って悲しんでくれる姿。見てみたいし。」

ユーマは「え」という顔で見てきたけれど、僕が目を細めて微笑んでみせると

パツと目を反らした。失礼だと思うけど、それを狙ってやったわけだから何も言わない。

「えーと、えつと・・・」

あ、じゃあ！！圭太の家に行く？お葬式の日程確認しないと。」

死神の仕事（後書き）

更新遅くなりました。

プライベートでいろいろありまして・・・。

でも気分落ちてる方が書きやすい話なので

ちょっと頑張ってみようかなという心境です。

ただ・・・1話が短いですかね？

他の方のを見ると長い気がするので、どっちがいいのかなあと
思ってみたり。

次は長くしてみます。

散歩（前書き）

お久しぶりです

散歩

「3日間、どーする？」

僕の父さんは海外赴任中だ。

ということ、帰国するのにスムーズに行かないことも考え、お通夜は明日。お葬式は3日後となった。

そして、お通夜には参加する気がなかった僕達はお葬式までの3日間、暇になった。

「ぶらぶらしたいな。」

僕、幽霊って少し興味あったんだよね。

空飛んでみたり、人を驚かしてみたり

「驚かすって・・・」

俺たち人には見えないんだけど。

ってか、圭太の部屋って殺風景だね。

ホントに住んでたの？」

僕の提案なんて1ミリも興味ありません。って感じで返された。

しかも勝手に人のテニスラケットで遊んでるし。

「この部屋に居ることはあまりなかったからね。」

写真が趣味だね。その写真を飾った部屋が別にあって、家に居るときはたいていそこにこもってたよ。

もしよければ見てみるかい？」

写真に興味があったのか、ユーマは黙って頷くと持っていたラケット

トを壁に立てかけた。

「写真。ね。似合うんじゃない。テニスやってるよりも、圭太って
ひ弱そうだし。」

「失礼なこと言うね。背は高いとは言えないけれど、君より10センチは高いし、筋肉だってそこそこあると思うけれど。まあスポーツマンと言うには肌が白いかもしれないけど、これは焼けにくい体質なだけだし。」

なんか言い訳っぽくなったけど、実際失礼だと思う。

ユーマがいくつか分からないけど、見た目は僕より下。
僕より小さな子に『ひ弱』呼ばわりされたくないよね。

そして、身長のことを言われたのが気に触ったのか、ユーマはムス
っと黙ってしまった。

そんなユーマを放っておいて僕は部屋を出た。
廊下の一番奥にあるドアを開ける。

壁にたくさんの写真が掛けてある。

掛けてある写真は四つ切の画用紙サイズまで引き伸ばしたもので額
に入れてある。

僕のお気に入りだった。

そして本棚には今まで撮った写真がファイルに保管されている。

部屋の端にあるドアはウォークインクローゼットになっていて、そ
こを現像室として使っていた。

つい昨日もこの部屋に入ったというのに、かなり懐かしい気がする。

ユーマは勝手に部屋の中に入ると、一番入り口の傍にある写真から眺めはじめた。

僕も横に立って、同じものを見ることにした。

ほとんどが空の写真だった。

僕は空が好きだった。

今でも好き。

嬉しいことがあった日も、悲しいことがあった日も、辛い日も変わらずそこに在ってくれる大きな空。

空を眺めていると、いつだって、悩みなんてものは小さなものにか思えなかった。

そして、僕の撮った写真。

写真達も空と同じようにどんなときも変わらない表情でそこに在ってくれる。

彼らはどうなのだろう。

家族は・・・

泣いてくれた。

友人達は・・・

僕を思つて泣いてくれるのだろうか。

それとも、TVの中であつた交通事故の一つとして認識されて僕がいたことなんて忘れてあつさを成長していつてしまうのだろうか。

僕の為に泣かないでほしい。

僕なんかの為に泣くくらいなら、僕との記憶を消してしまつてなかつたことにして、幸せに生きていつてほしい。

そんな気持ちと

泣いてほしい。

僕を思つて、心が壊れるくらい悲しんでほしい。

そんな黒い気持ちが混ざりあつているのを感じた。

ツツ――

隣で息を呑むような気配を感じて意識を戻した。

ユーマは目を見開いて、その写真を見ていた。

視線をたどるように僕も目を向ける。

夕日の写真。

地平線の向こうに沈む夕日――と言いたいところだけど、この狭い島に地平線というものは存在しなくて。

黒いガタガタとした影、家やビルの影の向こうに沈んでいく夕日を写したものだつた。

「綺麗だよ。この黒とオレンジのコントラストが僕も気に入って

いるんだ。

この写真はね・・・」

語り始めた僕に、ユーマは突っ込むこともなく、写真を見つめたまま聞いていた。

「隣町のある丘で撮ったんだ。

散歩をしていたら、テニスボールを打つような音が聞こえてきて、その音に誘われるがまま丘を登った。

階段を上がりきった頃には音はやんでいて、少し離れた場所にあった建物から元気のいい掛け声が聞こえてきたんだ。そこでやっと、剣道場に勝手に入り込んでしまったことに気付いた。

気まずい思いで急いできた道を戻ろうとUターンしたら飛び込んできたのがこの夕日だよ。

綺麗だと思うと同時に手が動いて写真を撮っていた。」

もう一度、その写真を見る。

「その後何度かここに行こうと思ったんだけど、よく覚えてなくて一度も行けていないんだ。今では本当にここがあったのかな。くらいに思えてくるよ。」

「なにそれ、圭太って方向音痴なわけ？」

ようやく、写真から目を離れたユーマが僕を見ながら少し馬鹿にしたように笑った。

馬鹿にされているはずなのに不思議と嫌な気持ちはしなかった。

たぶん、笑った瞳の奥に小さな悲しみが見えたからかもしれない。

でも、何でユーマが悲しそうなのか検討も付かない僕は気付かない

フリをした。

「わかった、散歩。行こうか。」

「え、どうしたの？いきなり。」

「圭太が言ったんじゃない。人を驚かせたいし、空を飛んでみたい。って。」

天国に行ったら、空飛べないらしいよ？今と同じ生活をするんだってさ。」

「なるほど、今のうちに楽しもうってことだね。」

幽霊2日目 く魔法みたいく

「死神も食べるんだ」

ユーマに聞いている今は、お昼だったりする。

昨日「驚かしに行こう」と言ったユーマは、もう夜だから明日にしようと言った。

正直、幽霊に眠いなんていう欲があるとは思わなかったけれど、幽霊にも睡眠は必要みたいで、寝てなよ。と言われ寝ることにした。

「寝よう。」ではなく「寝てなよ」と言うのはユーマには僕のお葬式の日程についてを上の人に報告する義務があるらしく天国ではないけれど死神の事務所のようなところに戻ると言っていた。

僕は自分の家の屋根の上に布団を敷いた。

布団の出し方はポケットに手をつ込んで自分が欲しいものを出来るだけ鮮明に思い描くこと。らしい。

ユーマは僕に簡単に説明すると、カルテを出したあのポケットに手をつ込み目を瞑った。

左手を引っ張ると白い布団の角が見え驚くほどスムーズに布団をポケットから出した。

出されたものは結構な質のものだった。ふわふわの低反発布団。

ユーマ曰く、サイズや形、色は勿論だけど、手触りや弾力性もイメージしつつ『綿』という素材も意識することでより鮮明かつ寝心地のいい布団を取り出すことが出来るって言っていた。

ちなみに綿にしたのは絹は高級だけれど、つるつる感が日本人には合わない。らしい。

とりあえず言われた通りにやってみて、ふわっふわの羽根布団を自分で取り出してみた。

なんでイメージだけで布団が取り出してしまうのか未だに分からなけれど、明日聞こう。そう思って僕は寝たんだ。

起きたら朝だった。

ただ屋根に布団を敷いただけだから太陽の光を遮れるわけもなく、いつもほどではないけれど眩しさを感じて目を覚ました。

眩しいと言っても刺すような眩しさではない。やはり死んでいるかなのかな。と思い知らされた。

横にはいつの間にか帰ってきたのか、ユーマが同じように布団を敷いて寝ていた。

熟睡しているようで、とりあえず寝かしておこうと思い、ボーッと屋根の上に座り空を眺めることにした。

次に気付いたのはユーマに「何やってんの？」と声を掛けられてだった。

僕が起きたときに東にあつた太陽は、ほぼ真上に来ていた。何時間も空を、雲を見ていた自分に少し呆れる。

そして冒頭に戻る。

「死神も食べるんだ。」

ユーマが布団を綺麗に整え、少し離れた場所にオープンカフェにあるようなアルミのテーブルと椅子を2つ、隣にサイドテーブルを取り出しさらにその上にトースターとポットを用意しだしたのを見て聞いたのだった。

「別にお腹が空くわけじゃないんだけどね。食べたりしたほうが気持ち的に人間でいられるでしょ？死神は人間相手の仕事なわけだし。ってジユンが言ってたから。」

確かに、食事は生活を彩ると思う。

「ジユンって？」

「俺の先パイ。先パイって感じじゃないけど、先に死神やってたわけだし、年上だし。先パイって認めたくないけど・・・」

ブツブツ言い出したユーマに、ジユンって人が少し気になったりした。

「はい、出来たよ。俺が他人に朝食を作ってあげるなんてなかなか無いんだからね。感謝してよね。」

テーブルにはハムと卵焼きがのったトーストと紅茶が用意されていた。ユーマの前にあるのは牛乳・・・否、おそらく牛乳がたっぷり入った紅茶。があった。

「ありがとう。」

お礼を言っただけで席に着くと、食事に手をつけずに僕を伺い見る目と目があった。

たぶんさっきの発言は、照れ隠し。そして、自分が作った朝食が受け入れられるか不安なのだろうと思う。

目が合った瞬間反らされた目も、すぐにちらりと見てくる。

そんな様子がおかしくてニコリと笑うと、「いただきます」と言っただけでトーストに噛り付いた。

「おいしいよ。ありがとう。」

朝食作れるなんてすごいじゃない。」

僕の言葉に、ユーマはほっとした顔をするようにややく自分のに手を付け始めた。

「ジュンに教えてもらったんだ。ホントは朝は和食がいいんだけどね。作れないし。」

「そうなの、今度僕が教えてあげるよ。姉さんが料理が得意でね。たまに手伝ってたんだ。」

僕の提案に、驚いた顔をしたあと一瞬悲しそうな顔をして、すぐに笑顔を作った。

笑顔になったというより、わざと作った。ような顔。

そこで気付いた。

僕とユーマと一緒にいられるのは、お葬式までだったことに。

僕達に『今度』はないんだ。

たった、1日一緒にいただけなのに

寂しいと思うなんて、

それだけ、ユーマのことを僕は信頼しているんだと感じる。

生きている人間なんて争ったり、憎みあったり汚いことばかりだったから、見るだけでも嫌だった。

「そういえば、なんでイメージしたものをポケットから取り出すことが出来るのかな？」

昨日寝る前に気になったことを思い出して聞いてみた。

トーストに噛り付こうとしていたユーマは突然話を変えた僕に一瞬頭の上に「？」を浮かべたあと
なるほど。という顔をしてそのままトーストに噛り付いた。

マイペースだなと思いつつも、もぐもぐごっくんと紅茶で口の中のものを流し込んでいる様子を見つめる。

「んーーーーわかんない。」

「……………。」

「……………モグモグ。」

「・・・・・・・・・・。」

「モグ・・・・。」

「・・・・・・・・・・。」

そのまま食事を続けようとするユーマを見つめ、視線を感じてユーマが目線をあげたのを見計らって笑顔を取り繕ってみた。

ニコリ——と擬態語が付きそうな微笑。

生前、一部の友人から黒い微笑み。と言われた表情。

勿論、今までも意識して使ってきた。

言葉で表すなら

「話してくれるよね？」

話そうとした思わせぶりの態度をとったんだから、責任はとって欲しいよね。

「ハア、めんど。

俺も詳しくはわかんないんだ。

簡単に言っと。

俺たちの姿と一緒に。実際には形なんてないんだ。形つてものは肉体を指すからね。俺たちみたいな魂だけの存在に形なんてものはない。ただそれじゃあ話も出来ないし、自分がどこにいるかもわからず消えてしまうことになるから、イメージで体を作っているんだ。

そして、服も着てる。これもイメージなんだよ。」

わかった？ユーマは顔を傾げて目だけで聞いた。

「じゃあ、僕達の体は実際には存在してないし、この布団や食べ物も存在していないってこと？」

「そう。だけどそうじゃない。」

俺たちは存在してる、魂がね。ないのは体だけ。体つてのは魂のいれものなんだ。

魂を見分けるために様々な外見を持って作られているんだよね。

で、イメージでその入れ物を作っているワケ。

同じように食べ物とかテーブルも作ってる。簡単に言うと他人に影響を及ぼす妄想なんだよね。」

「なるほど、妄想ね。」

フフ、わかったかも。」

「妄想でできたものは手を加えることによって、味や形まで変えることが出来るんだ。」

それもイメージの一種であって、そのまま料理を出すよりも、素材を出して調理することでより鮮明なイメージが出来るから俺たちは面倒だけど調理をして食べてるんだ。」

「最初に出したカルテも？」

「そうだよ、イメージで用意された紙にデータを書き込んで、イメージ『紙』が『カルテ』に再設定される。それをポケットにしまう妄想をする。取り出す妄想をする。それで『カルテ』が存在してるように見えるんだよ。」

言いながらユーマは実際にポケットから紙を取り出したり、しまったりしてくれた。

「もう一つ言っておくと、実際にはポケットを使わなくても空中にモノを出すことは出来るんだ、ただ空中に思い描くのが面倒だからポケットを使っているんだけどね。」

「なんていうか、魔法みたいだね。」

僕の言葉に、ユーマは一瞬きよとした後口の端を上げてニヤリと笑った。

「まさか、圭太からそんな言葉が出るとは思わなかったけど、ジュンはよくそう言ってたよ。」

「ジュンって人はかなり物知りなんだね。」

「まあ、死神暦が長いからね。
てか、そろそろ行かない？オサンポ。屋根の上で一日が終わっちゃうじゃん。」

「それもそうだね。」

幽霊2日目 く魔法みたいく（後書き）

なんて言うか……。少し『仕組み』を説明したいと思って書いてみたら思いのほかどんどん深みに嵌っていつてしまいました。彼ら、屋根の上から全く動いてませんね。次回は散歩させます。

幽霊2日目 くテニスく

「圭太もテニスやるんだよね。」

ユーマの一言によって、今ストリートのテニスコートに居た。

ストリートなんて使ったことのない僕は、出来れば設備の整ったテニスコートを使いたかったんだけど。

「身分証のない俺たちがどうやってコート借りるわけ？」

それとも夏休み真っ只中、大会目前にして部活中だと思われる学校のコートでも使う？」

「別に手続きをして借りなくても、僕達は見えないんだからどここのコートでも使えるんじゃない？」

フッ

鼻で笑ったのはユーマだ。

「最初はそう思うんだよね。」

で、実際やってみるとする。俺たちが使っているコート。

生きている人からみたら空のコート。そこに入ってきて使い始めたら、どうなると思う？」

意図せず勝手にダブルス、最悪3対3。しかも自分達のボールがどれか分からなくなってしまう上に
邪魔ものだらけだ。

その光景を想像して嫌そうな顔をした僕を見てユーマはニヤつと笑った。

「だから、姿を見せるんだよ。
使ってますって証拠にね。」

「姿を現すのもイメージで出来るの？」

「自分の妄想を他人に干渉することで実際に在ると見せるイメージ。
それを死人にだけでなくこの世界に在るもの全てに干渉させるんだ。」

「本当はあまり許されたコトじゃないし、上にバレても怒られるし・
・・。」

並大抵の人には出来ないからあまりやらないんだけどね。

圭太ならあつさり布団出してたし出来るかなと思って。」

1番の理由はテニスをしたいだけ。

顔にそう書いてあったけど、気付かないフリをした。

死んだと知ったとき、好きだったテニスが出来なくなったことに少なからずショックを受けていたから、また出来ると知って嬉しいのは僕も一緒だから。

ただ一応僕は死んでいるわけで、もしかして知り合いにでも見られたら大問題になってしまう。

出来ればあまり人に見られたくない。

そしてそういったことも踏まえて、決まったこの場所。

いくら世間では夏休みといえど、太陽がてっぺんより少し落ちかけ

たところに位置する午後2時という1日で一番暑い時間にストリートでわざわざテニスをやっている人はいないだろうということ。

「姿現せる？俺やってみるから見てて。」

姿を現すために突然現われるには人に見られると厄介ということでテニスコートの傍にあった公衆トイレへと入り、ユーマは目を瞑って深呼吸した。

心臓のある部分を中心として手足、頭へと末端へと広がるように光が走ったような気がした。

「今ので、現われたのかい？」

光が走ったあとはさっきと何も変わらないユーマの姿に、本当に人間から見えるようになったのかよく分からない。

「うん、意識しなくても扉に触れられる。」

個室の扉をノックして見せてくれるけど・・・やっぱりよく分からない。

「~~~~と、とりあえずやってみて。」

ユーマのまねをして目を瞑って精神を集中させる。

と言っても、何をどうすればいいかわからない。

「生きている人間に見えるようにってイメージするんだよ。」

僕がどうしたらいいかわからないのに気付いてユーマがアドバイスをくれる。

言われたとおり、自分の体が他人に見えるように、とイメージしてみられるけど、

モノを出すのとは違ってイメージしにくい。

自分の体に何も変化が起こった気がしないし。

恐る恐る目を開けてみるけれど、目のあったユーマの顔は横に振られた。

もう一度……。

「ごめん、できないみたい。」

目を開けて難しい顔をしているユーマに僕はまた成功しなかったことを察して謝った。

せつかくテニスできると思ったんだけど、残念だね。

残念そうな顔をしているだろう僕に対してユーマはポケットの中をぐそぐそやっていた。

真剣そうな顔をしてポケットの中を漁っているから声はかけないで「何をやっているの」という気持ちをこめて首をかしげる。

「思い出したっ!!」

ユーマが出してきたのは……日焼け止め。だと思う。

「これ塗ってみて？」

塗ったところから体が現われるから。」

うん、やっぱり日焼け止めを渡される。

「?どう見ても日焼け止めにしか見えないんだけど。」

「どこが！？よく見てくれる？
「こっ！！」

そう言っ指差したのは日焼け止めのラベルの真ん中、太陽のマークが描かれているところ・・・
否、よく見ると太陽に似せた目だ。
瞳のマークが描かれていた。

「人間に見えるようになる薬だっって言ってるじゃん。
ちゃんと目のマーク付いてるでしょ？」

今まで僕が生きてきた世界にはなかったものなんだから、少しくらい勘違いしたって良いじゃない。

って言い換えそうかと思っただけ、僕の方が（見た目）大人だしね。

「クスクス、分かったよ。ありがとう、使ってみるね。」

必死になって可愛いなーと、大人が子どもを見るような目で笑いながら日焼け止め——もとい身体現し？を受け取った。

そんな僕の微笑みをユーマが睨みつけながら渡した。

僕なりの仕返しは成功したみたい。

さて、少し馬鹿にはしたけれど、死神のユーマが塗ったら姿が現せると言うんだからそうなんだろうね。
塗ってみよう。

蓋を開けて中身の液体を手に取り腕から塗ってみた。

とても日焼け止めに似ている。

ただ・・・塗ったところからさっきユーマが光ったように僕の身体も一瞬だけ光つてもとのように戻る。

腕を塗って足と比べてみると色が違うように見えた。

塗る前は古びた写真のようで、塗った方が新しい写真のような鮮明な色。

肌や服の色が変わるのがおもしろくて楽しみながら全身に塗った。服の上から塗るのに少し抵抗があったけれど、キャップをはずして中身をたっぷり出せばそんなに苦でもなかった。

「姿現せたじゃん。」

「うん、ユーマのこれのおかげだよ。」

僕はユーマに姿現しを返した。

「本当は・・・」

ユーマは言いながら僕の身体を見る。

前から後ろ、下から上までゆっくりと僕の周りをまわった。

たぶん、塗り残し、というか現われ残りがいないか調べてくれてるんだと思う。

ひとしきり見終わったあと、ユーマは満足そうな顔を見ると、再び口を開いた。

「日焼け止めなんだよね。」

パッケージに細工してみたけど。」

そう言ってさっきの姿現し、ではなく日焼け止めを振りながら不敵

な笑みを浮かべた。

「え？」

散々、日焼け止めじゃないって言うておいて？

「大切だったのは、圭太がこれを『姿現し』と信じてくれること。そして全身に少しずつ塗っていくことによって、姿を現すイメージがしやすくなること。だったんだよね。」

なるほど、この液体を塗ったら姿を現せると思い込んだ僕がそれを身体に塗ることによって、身体が現われていくという『思い込み』をするためのものだったわけだね。

「フフツ、それもジュンさんの受け売りかい？」

「よく分かったね。俺も姿現しなんて最初は出来なかったからね。日焼け止めをさも秘密兵器、なんて風にポケットの中を探すフリからね。」

してやつたりと笑うユーマを見ながら、ジュンさんって人がユーマにとって相性ぴったりの先輩だったんだなぁって思う。

「さて、準備できたことだし、トイレから出ない？においは感じないからいいんだけどあまり長いこといたい空間ではないし。」

僕の言葉にユーマがコクコクと頷いて、外に出た。

出た途端明るい日差しに目を細めてしまっけれど、やっぱりあまり眩しいとは感じない。

姿が現せてもそういった自然には干渉できないのかな？

ざわつと音を立てて木が揺れる。
風が吹いたらしい。
やっぱり、感じない。

少し悲しくなった。

でも、ユーマがコートへと向かって歩き出したのでそのままついていった。

さっきまで無人だったコートには人がいた。

4人でダブルスをやっている。

残念、こんな暑い日にコート使ってるとは思わなかったのに……。

そう思って「どうする?」というつもりでユーマの方に目をやると、ユーマは僕の方など見向きもせずそのままコートへ向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2472t/>

夕日の向こう側

2011年10月9日02時52分発行